調査報告

二つの城館跡の位置が判明

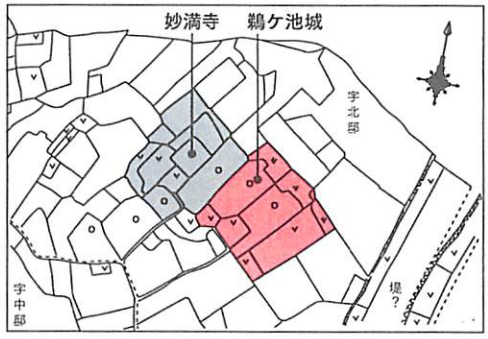
市史編さん室長
石川（いしかわ） 浩治（こうじ）

新編西尾市史の編さんでは、考古部会執筆員の奥田敏春氏を中心に中世城館の調査を行っています。市内には約60もの中世城館がありましたが、東条城や寺部城、室城のように丘陵上に築かれたものを除き、多くが平地に築かれていたため、廃城後は堀や土塁が破壊されて現在その姿を留めるものは少なく、『三河国二葉松』などの江戸期の地誌にその名が知られるだけで、位置さえもわからなくなっている城館もあります。そうした城館を調べるには、明治期に作られた地籍図の調査や地元での聞き取り調査、実地調査、発掘調査などの方法があります。今回はそうした調査によって新たに位置が判明した鵜ケ池城と巨海城の事例を紹介します。

鵜ケ池城は、西尾市鵜ケ池町地内にありましたが、位置や構造は明確ではありませんでした。『西尾私史』によると城主の富永忠安は吉良氏の家臣で、新城市の野田村の館から永禄七（一五六四）年に鵜ケ池城に隠居し、翌年徳川家康から寺を建てる土地と寺領を安堵されて妙満寺を建てたと伝えられています。

今回、地籍図や現地調査によって鵜ケ池町上屋敷地内で鵜ケ池城の位置が判明しました。地籍図によると鵜ケ池城は約60ｍ四方の方形居館で、同地には現在も富永氏のご子孫がお住まいで、隣に旧地名「妙満寺」が伝えられています。妙満寺は富永氏の菩提寺で現在は大給町に移転していますが、鵜ケ池城と菩提寺が並列する構造であることがわかりました。地籍図を見ると鵜ケ池城と妙満寺にそれぞれ通じる道があり、城と寺が並列な関係であったことがわかります。

鵜ケ池城は吉良氏滅亡後に富永氏が隠居した城のように思われていましたが、菩提寺と居館が並び立つ構造は寺津城等吉良氏の家臣にみられる構造で、鵜ケ池城はただの隠居屋敷ではなく、それ以前からの富永一族の拠点のひとつであった可能性も考えられます。富永氏は室城（西尾市室町）が本拠地とされていますが、他にも岡山城（吉良町岡山）も支配しており、富永一族は、室城、鵜ケ池城、岡山城という複数の城館を支配下に置き、幡豆郡域の一部を支配する一族として考え直す必要がありそうです。

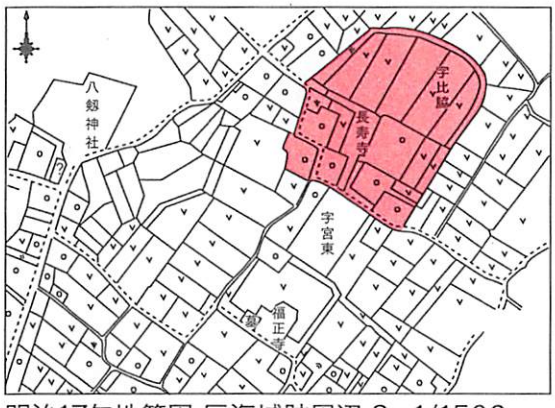


明治17年地籍図 鵜ケ池城跡周辺 S=1/1500

巨海城は『三河国二葉松』に城主が巨海新左衛門と伝えられるのみで、場所については寺津中学校校庭南の台地の端の枯木宮と言われる場所と推定されていました。今回、地籍図の調査で寺津小学校の南の長寿尼寺跡付近に90ｍ四方の区画を確認し、巨海城の跡と推定しました。巨海城推定地の現状は畑地で、周囲には藪地目の細長い区画が巡っています。これは、堀又は土塁の痕跡と思われます。注目すべきはその形状で、南側は方形ですが、北側は円形になっており、軍事的な改修が行われたことを示唆します。付近の発掘調査では15～16世紀の住居跡や鉄滓などの遺物が出ています。城主の巨海氏は吉良氏の家臣であり、巨海城の付近には永正五（一五〇八）年巨海勘解由尉秀国の棟札がある八剣神社や吉良氏縁の願成寺や長寿尼寺があり、巨海城を中心とした集落が営まれていました。今後城跡の発掘調査の機会があれば更に詳しいことが判明するでしょう。

中世の史料は残されている文書が少ないのですが、城館の構造を調査することで文献史料には表れない地域史の資料として活用できるのではないでしょうか。

今回紹介した鵜ケ池城や巨海城の調査成果は、来年度春に販売する『新編西尾市史 資料編1 考古』に掲載されますので、是非お買い求めください。



明治17年地籍図 巨海城跡周辺 S=1/1500